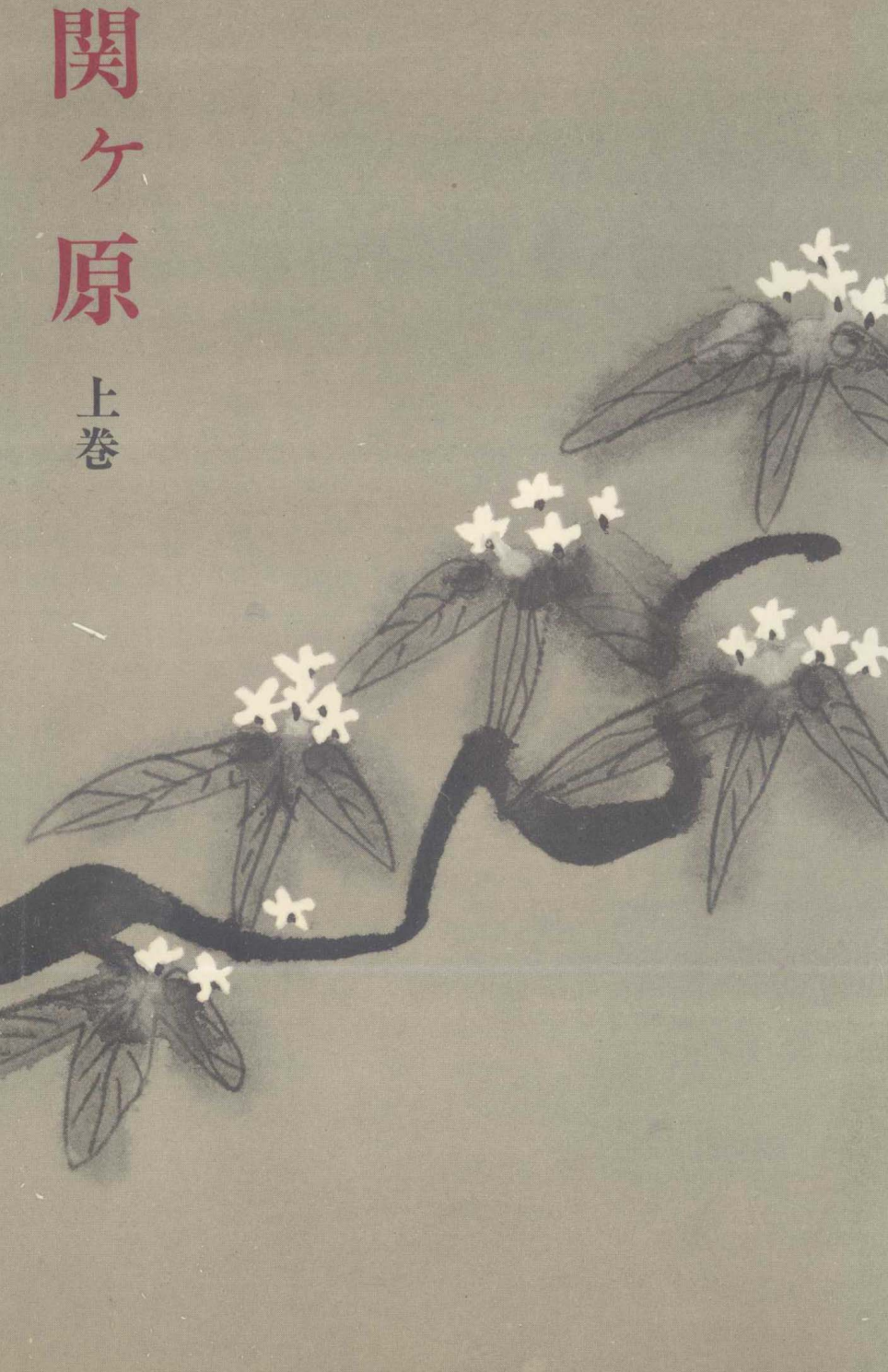
関ヶ原

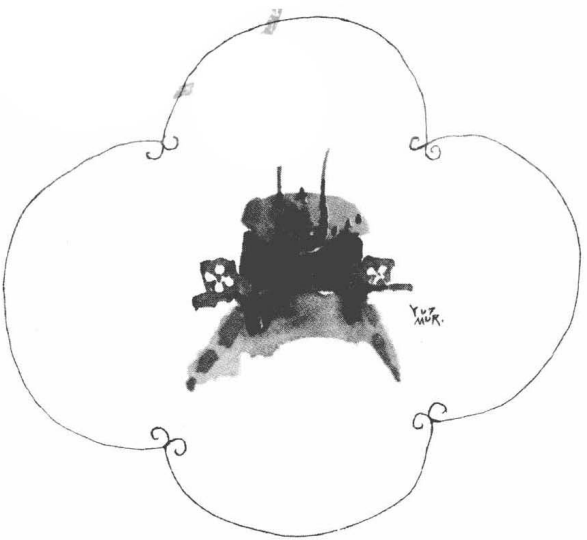
上巻



司馬遼太郎

関ケ原

上巻



新潮社

関ケ原（上）

昭和四十一年十月二十五日発行
昭和四十五年十月十五日十七刷

定価四四〇円

著者　司馬遼太郎

発行者　佐藤亮一

発行所　株式会社　新潮社
郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話東京（〇三）二六〇一二二一
振替東京八〇八

印刷所　二光印刷株式会社
製本所　新栄社製本所

落丁本はお取替えいたします

© by R. Shiba Printed in Japan

目

次

高宮の庵……七
人と人……一八
女と女……三〇
奈良……四一
軒猿たち……五三
伏見城下……六三
菓子……七四
秀吉と家康……八六
狼藉……九七
秀吉の死……一〇九
博多の清正……一二一
桔梗紋……一三三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

霜の朝……一四五
訴訟……一五六
藤十郎の娘……一六八
暗躍……一七九
大坂へ……一九〇
問罪使……二〇一
評判……二一三
暗殺……二三四
向島……二三七
黒装……二四八
藤堂屋敷……二六〇
利家の死……二七二

暮春……二八三
密約……二九四
脱走……三〇四
変幻……三一六
謀才・謀智・謀略・謀議……三二七
瀬田の別れ……三三九
大坂へ……三五〇
大芝居……三六二
大坂城へ……三七二
西ノ丸……三八三
芳春院……三九五
大津の一夜……四〇六

関ケ原（上）

装幀　村上　豊

高宮の庵

いま、憶いだしている。

筆者は少年のころ、近江国のその寺に行った記憶がある。夏のあついころで、長い石段をのぼって行った。何寺であったかは忘れた。

寺の縁側にすわって涼を入れると、目の前に青葉か繁っていたことが、きのうのようにおもいだせる。そのむこうにひろびろとした琵琶湖畔の野がひろがっていた。

「わしがいますわっているここに」

と、私どもをここまで連れてきてくれた老人が、縁側の板をトントンとたたいた。老人は、身ぶり手ぶりをまじえて、私ども少年たちに寺伝の説明をしてくれた。

「太閤さんが腰をおろしていた。鷹狩りの装束をなされておった。その日も夏の盛りでな。きょうのように眼に汗のしみ入るような日中やった」

と、老人は汗をぬぐった。町のおとなたちはこのひとを「かいわれさん」と呼んでいたか、なんという姓のひとだったかは、その当時から知らなかった。

老人は、洋日傘と、扇子を一本もち、糊のきいたちぢみのシャツとズボン下の上に、生帷子の

道服じみたものを一枚身につけている。

「茶を所望じゃ」

と秀吉がいったという。寺の奥で声がし、立ちあらわれるのは、当時この寺の小僧であった石田三成である。

余談だが、この俗伝は、少年雑誌などの絵物語などに載っていて、老人からきくまでもなく私どもはよく知っていた。

いま、関ヶ原という、とほうもない人間喜劇もしくは「悲劇」をかくにあたって、どこから手をつけてよいものか、ぼんやり苦慮していると、私の少年のこういう情景が、昼寝の夢のようにうかびあがった。ヘンリー・ミラーは、「いま君はなにか思っている。その思いついたところから書き出すとよい」といったそうだ。そういうぐあいに、話をすすめよう。

この老人が話してくれた三成の小僧時代の話は、『武将感状記』などにのっている。かれの在世当時から、相当世にひろまっていた挿話であろうとおもわれる。

当時秀吉は、信長の部将として近江長浜二十余万石に封ぜられ、はじめて大名になったころである。

領内で、鷹狩りをした。鷹狩りというのは領内の地形偵察と民情視察をかねた目的のあるもので、秀吉もそのつもりでいる。

だけてはない。かれの場合、にわか大名であるだけに、二十余万石の軍役をまかなうだけの武士を抱え入れなければならなかった。鷹狩りをしながら、獲物の鳥獣などよりも、領内でしかるべき人材はいないか、ということのほうが関心ふかかったであろう。秀吉譜代の大名といわれる

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

加藤清正、福島正則、藤堂高虎らは、ほとんど秀吉のこの時に召しかかえられている。

さて、三成は。

幼名、佐吉といった。近江坂田郡石田村に住む地侍石田正継の次男で、このころ寺に入れられていた。一書には学問修業のためにこの寺に通っていたともいい、一書には、寺小姓であったともいう。

十代のはじめごろであった。

きりっとした顔だちで、よく動く涼やかな眼をもっている。たれかみても眼に立つほどの少年だった。

秀吉は、このあたりまで鷹狩りにきて、のどのかわくあまり、いきなり入ってきたらしい。

「茶を点じて参れ」

と、縁側に腰をおろした。

佐吉は奥で茶の支度をした。この少年の父正継は農村にかくれているとはいえ、代々の地侍で、家計は豊かであった。身なりはわるくなかったであろう。

やがて、静かにもっていった。秀吉は蟬しくれのなかに腰をおろしている。

「粗茶でござりまする」

とさしだすと、秀吉はいそいで飲み、

「さらに、一ぷく」

と佐吉に命じた。その最初の茶碗は、『武将感状記』に、「大いなる茶碗に、七、八分にぬるくたてて持ち参る」とあり、秀吉これを飲み、舌を鳴らし、「気味よし、さらに一服」と命じたと

いう。乾ききっているから、むさぼり飲んだのである。そのための湯の量といい温度といい、ちょうどよかった。

「かしこまりましてござりまする」

と佐吉ひきさがり、こんどは湯をやや熱くし、その量は最初の半分ぐらいにした。

秀吉は飲みほし、さらに一服、と命じた。このころから、この少年、使える、とおもって観察しはじめていたのであろう。

三度目に運ばれてきたものは、容器も小茶碗である。それに湯の量はほんのわずかて、舌の焼けるほど熱かった。秀吉はこの少年の頓着に感心し、

「そちは、なんという」

とたずねた。佐吉は切れ長の眼を伏せ、

「御領内石田村に住まいまする石田正継が子にて、佐吉と申しまする」

と答えた。

(この児佳し)

と秀吉は、おもった。大人になれば使えるてあろう。そのあと、二、三ものをたずねると、頭の反射がいい。いよいよ気に入り、寺の住持に頼んで城にもらいうけることにした。

この、秀吉と三成との最初の出遭いになった寺は、長浜城外の観音寺であるといい、伊香郡古橋村の三珠院だともいう。場所などどちらでもいい。

ほかに、こんな話がある。

実話とすれば、三成の二十歳前後のことであろう。
それまでは児小姓のようなぐあいで、かれの扶持は秀吉の直接経理からまかなわれていた。
「知行取りにしてやろう」
と秀吉はおもった。三成とおなじく秀吉手飼いの鬼小姓であった加藤虎之助（清正）は四百七十石、福島市松は五百石という知行をこの時期か、その前後に頂戴している。
「佐吉、そなたにも新恩五百石をあたえる。なお忠勤をはげめ。ついては所存かあるか」
と秀吉がいった。
『古今武家盛衰記』のなかの三成は、平伏して礼を言い、「されば」と顔をあげた。
「宇治川・淀川に荻や葭（葦）がはえておりまする」
といった。
これら自生の植物を川沿いの郷民かほしいままに刈りとり、葭簀を作ったりさまざまなことに役立てている。三成はいう。その伐りとりに運上（税金）を取りたてる権利をくださるならば、五百石の知行は要らない、というのである。
ひょっとすると、三成か育った琵琶湖畔では、古来、湖の葭などを刈りとるのは領主に運上を出さねばならぬしきたりだったのであろう。
それにしても、そういうことに眼をつけるこの男は、よほど経済のわかる人物だったにちがいない。
「どれほどの運上かとれる」
と秀吉がおもしろがってきくと、三成はたちどころに計算し、
「一万石に相当いたしまする。さればその権利を頂戴しますれば、一万石の軍役をつとめまする」

といった。秀吉はこの男の頭脳に驚いた。
しかし、同僚の虎之助や市松は、まださほどの行政感覚をもちあわせず、戦場働きに専念している時期だったから、
（佐吉とはいやなやつだ。殿はなぜあのような者を可愛がられるのか）
とおもったであろう。
とにかく秀吉は、武功者も好きだったが、三成のような才能をとくに愛した。いつか、かれはいったことがある、――三成はわしに最も似ている者だ、と。
「葭刈りに運上をとるなどということは古来きいたことがない。しかし、その案、なかなかおもしろくもある。しばらく様子を見るという意味でさしゆるしてやろう。ただし庶人に難儀のかからぬようにせよ」
と秀吉はいった。
三成は、さっそく、宇治・淀川の川上から川下まで数十里のあいだ、自生している荻・葭を、
「一町につき、いくら」
という運上をきめ、在所々々の郷民に刈りとらせ、それを京・大坂方面に売らせた。
大きな利を博した。
ある戦場に秀吉が出役したとき、むこうから軍勢がやってくる。団扇九曜に金の吹貫つけた旌旗を真先に持たせ、武具、馬具、華やかに鎧うた武者数百騎が、それぞれ金の吹貫を一本ずつ旗印として纒い、しずしずと押してくる。
「あれは見なれぬ旗じるしよ、敵か味方か、たずねて参れ」
と秀吉が使番を走らせてみると、なんと河原の雑草の運上で人数をそろえた石田佐吉の隊であ

ったという。

真偽はべつとして、三成ならありそうなことてある。秀吉は三成のこういう才を愛し、朝鮮出兵のときなども、もっとも数学的頭脳を要する渡海運輸のことを主管させた。

船は四万艘ある。兵は二十万人。さらに馬や、兵糧、馬糧、硝薬、弾丸、矢。これらを輸送するのに、まず船の割りあてをし、ついて朝鮮へ送りとどけてから空船は対馬にさしもどし、そこからまた積んでゆく。空船か海上にいる時間をてきるだけ少なくし、満船の回転をよくするには、満船、空船の速度、積みおろし時間、軍船と荷物船のかねあいなど、複雑な計算の基礎か要る。三成はそれをとどこおりなくやってのけたか、これだけの大軍を輸送するばあいの、これは世界戦史上の稀有な成功といっていい。

その才能の萌芽は、すてに少年のころの湯茶の温度のはなし、淀川の荻茂咄にある。

さて三成が、大名にとりたてられたのは、数え年二十三、四歳のときてある。

これは、秀吉手飼いの小姓出身としては早すきるほうではない。

十五歳て秀吉の小姓になった武辺者の加藤虎之助は、二十五、六歳て、一躍、親衛隊隊士からぬきんてられて肥後熊本二十五万石の大名になっているし、福島市松も似たような経路で伊予今治十万石をもらっている。この運命の変化はへつだん魔法てもなんてもない。信長か死に、秀吉がにわかに天下取りになったからである。

三成の大名としての最初の石高は、右ふたりのかれの同僚よりも、身上か、はるかに小さかった。

四万石

であった。ただしその領地は、四国や九州の遠国てはなく、近江水口であった。近国というの

は当時の大名として政治的にも経済的にも不利ではない。なににしても秀吉は自分の秘書官である三成を、手近におきたかったのであろう。

ところで、大名ともなれば多数の家来を召しかかえなければならない。

秀吉は殿中でふと、

「佐吉、そなたを大名に取りたててやったがその後、いかほどの家来を召しかかえたか」

とたずねた。

この近江者は、荻・葭て一万石の人数をととのえる、と言ったことのある男である。さだめし、思いもよらぬ才覚で分限以上の多数の家来を召しかかえたてあろうと質問者の秀吉は期待した。

「一人てございます」

と、三成は意外なことをいった。この挿話が、『関原軍記大成』に出ている。

「一人とは何ぞ」とおどろき、秀吉はその一人の名をきくと、

「筒井家の浪人島左近でござりまする」

と三成はいった。秀吉はさらに驚いた。しかし思いかえして噴きだした。

「島左近は当代の名士だ。そちのような小身者のところには来るまい。うそだろう」

島左近は、かつて大和の筒井順慶の侍大将として合戦と謀略の天才といわれた男て、秀吉も山崎合戦のとき、順慶の使者として陣中にやってきたことを記憶している。

順慶のもとて一万石を食み、順慶の死後、筒井家が伊賀へ国替えになるときに、この左近は牢人した。

それが、どういうわけか近江の犬上川のほとり高宮郷というところて隠棲していた。高宮というのは、いまの彦根市街から南へ一里ばかりのところにある田園で、当時は森と川の美しい里て

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com